



Title	鷺宮町・幸手市の経験から学ぶ観光まちづくりのキーポイント
Author(s)	山村, 高淑
Description	第一部: 第6回観光創造フォーラムの記録. 講演録. 基調報告1
Relation	次世代まちおこしとツーリズム : 鷺宮町・幸手市に見る商店街振興の未来 = Community Development and Tourism for the Next Generation
Citation	CATS 叢書, 4, 20-26
Issue Date	2010-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42917
Rights	© 2010 山村高淑
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS04_004.pdf



基調報告 1 「鷺宮町・幸手市の経験から学ぶ観光まちづくりのキーポイント」

山村高淑（北海道大学観光学高等研究センター准教授）

それでは、これより後半のプログラムに入りたいと思います。お手元の日程表にございますとおり、後半は、鷺宮町商工会事務局の皆さんに御登壇いただきまして、これまで、現在、そして未来に向けて取り組まれている内容につきまして、是非、広く御紹介いただければと思います。私自身、今回は裏方ということで、是非、商工会の皆さんが取り組まれていらっしゃることを、広く皆さんにまとめてお伝え出来ればと思っております。

■はじめに

まずプログラムどおり私の方から、まちづくりのキーポイント、商工会の皆さんの事例紹介に先立ちまして、こういった視点で見ただけだと良いのではないかということ、御紹介出来ればと思っております。先ほどから何か偉そうなことを申し上げておりますが、カミングアウトいたしますと、私が商工会さんとお付き合いするようになったのは、元々は「らき☆すた」の視聴者だったことがきっかけなんです。イベントに参加致しまして、そのイベントが非常に面白かったんです。先ほどセンター長の石森からありましたように、もともと次世代ツーリズムとは何ぞや、といったことを仕事柄考えていたのですが、そうやって考えていたことが全てここで実現出来ているのではないかと思ったんです。こんな楽しいイベントを何で実現出来るんだろう、是非お話を伺いたい…ということで、鷺宮町商工会さんとお付き合いさせていただくことが始まったという経緯がございます。

今日の主旨、後半部分の主旨なのですが、先ほども申し上げましたとおり、広く市民の皆さんに、鷺宮町・幸手市両商工会さんのお取り組みをご紹介できれば、ということで企画致しました。大きく市民の方と申し上げても、四つカテゴリーがあると思います。これら皆さんのそれぞれに役に立つ情報が御提供出来ればと思っております。

まず1つ目は、商工会ですので、会員の事業主の皆さんがいらっしゃいます。2つ目、地域住民の皆さんです。そして3つ目は、鷺宮、幸手ファンの皆さんですね。先ほどの石森の言葉を借りますと、第三の市民の方々です。それから4つ目、これは忘れてはならない「らき☆すた」ファンの皆さんです。

本当に、鷺宮町、それから幸手市に参りますと、気持ちが良いんですね。これは他の言葉で形容出来ないのですが、居心地が良くて、気持ちがよくて、商店街の店主さんなんかとお話ししていても、本当に心地良い感じがします。今回のフォーラムを開催す

ることで、少しでもそういった交流を促進するためのお役に立つことができれば、私自身も、鷺宮・幸手の一ファンとして、嬉しい限りです。そんな思いで、この後半のセッションを進めて参りたいと思います。

■鷺宮・幸手の魅力と事例研究の意義

ちょっと堅い話になりますが、最初に結論めいたことを申し上げます。観光と言うと今まで、旅行商品やお土産を開発して売るということを、観光研究も観光業者も考えてきました。しかし、鷺宮町・幸手市の取り組みを見ていますと、単に商品を作って売っているだけではないんですよ。何をやっているのかと言いますと、交流のための仕掛けとか接点を作っている。そして、その結果として、経済的な利益が付いてきているということですね。例えば入込客数をどうするのか、とか、儲けをどれくらい、というところからスタートしていない。ここは、非常に重要なポイントだと思います。

さて、ここからまたカミングアウトの続きなんですが（笑）、個人的経験です。イベントに参加しまして、この魅力は何なんだろうと。鷺宮に自分自身の居場所があるような感情を私自身おぼえたんです。しかも、神社の前の駐車場にいますと、私とほぼ同世代の皆さんがいて、なんか仲間がいるな、みたいな感じをおぼえました。これまで仕事上、論文ですとか教科書、観光関係のテキストを読んでいて、書かれている理論とか手法に対して、実際本当にそうなのかな、とか、本当に役に立つのかなこれ、と思っていたのですが、鷺宮町に来たら、観光で研究すべきことが実は全部わかってしまうのではないかと、教科書を読むよりも鷺宮町で勉強した方が良いのではないかと、というようなことまで感じました。

我々が、研究という立場、大学という立場で何が出来るのかということ考えた時に、実際これまで取り組まれてきたこと、商工会さんが取り組まれてきたこと、ファンの皆さんがボランティアとして取り組まれてきたこと、こういったことを客観的に記録として残しておくということが、純粹にお役に立てることなのではないかと考えました。御存知の方もいらっしゃるかと思うんですが、「鷺ペディア」という、非常に技術が拙くて出来の悪いホームページなのですが、作らせていただいております。最近、更新が止まっています…すみません。

話を戻します。率直な感想です。ここに来れば何か面白いことがあるだろう、あそこに行けば誰がいるだろう、こんな企画もここなら出来そう、今回の「萌えフェス」もそうだけれども、実現してしまう、そう思わせる場所が、鷺宮・幸手なのかなと感じています。

■商工会の果たした役割

さて、そういう意味で、先ほどの石森の話でも「磁力」という言葉が出てきました。観光で言うところの「磁力」。人々を惹きつける力、地域の魅力、そういったものを高

めていく。地域は一体どうやったらこの磁力を持つことができるのだろう、観光学、観光研究分野は延々このテーマを研究してきたわけです。地力の魅力を高める研究ですね。しかし、上手く行きません。教科書、あるいは海外の事例、そういったものを研究して、磁力を高めようと研究しても、なかなか上手くいく結論ができません。逆に、鷺宮に来た時に驚いたのは、基本的にまちおこしに関わる方々に観光関係者がいない。これ、重要なポイントだと思うんですね。まちおこし、観光振興に観光関係者がいない。商店街を中心として、商工会がこういったことを実現していく。どうしてこうしたことを実現できるのだろう、これは研究者として明らかにしなければならないことなのでは…とちょっと火がつきまして。商工会のSさんとMさんに——あえて仮名で、SさんとMさん(笑)という良い組み合わせです。キャラクター的にも、そうですね？(笑)——インタビューさせていただきました。「何故こんなに楽しいイベントが企画、実施出来るのですか?」。初対面ですので丁寧に聞いたのですが、本音は、商工会さん、そんなことやっちゃって良いんですかということを知りたかったんです(笑)。ちゃんと答えてくれました。

「ノリです。」

殴られたように目が覚めました(笑)。何百本と観光関係の論文を読んでもわからなかったことが、この4文字で片付いてしまったんです。非常に素晴らしいなと感じました。さらに当初の経緯をこう紹介してくれました。

Sさん曰く「ファンの方に喜んでいただこう。せっかく来ていただいている。楽しいことをやっちゃいましょう」。Mさん「まあ、やっちゃいましょうか」。そうすると、会長が、「感性で仕事しなさいよ。責任は私が取るから思い切ってやりなさい」。これは本当に素晴らしい上司と部下の関係だと思えます。これには心底感動しました。

その結果として、こういう交流が生まれて、そして1対1の人間関係が、商店街、個人事業主さんを中心に広がっていった。顔が見える関係性が出来、育っていつている。これが非常に重要だと思います。そういった交流の核となる場所や人が、商工会という機関にはあったんですね。お手元に年表をお配りしていますが、「らき☆すた」が放映されるかなり以前に、齋藤会長の発案で大西茶屋が作られました。神社の門前にお休み処が無いので大西茶屋を作っておこう、と。それがその後、ここで核となって、交流の一つの中心になったわけです。非常に素晴らしい先見の明だと思います。

結果として、観光研究でいうところの「おもてなし」、「ホスピタリティ」、「プラットフォーム」——こういう難しい言葉を言いながら、言っている研究者たちにおもてなしの心が無いのが問題なのですが(笑)——そういうものが鷺宮にはもともとあった。それがまちおこしのプロセスで自然に表にあらわれてきた。本当に自然な形で。これが非常に素晴らしいなと思えましたし、研究の面でも参考になりました。

■「鷺宮幸手方式」

ちょっと堅い話なのですが、冒頭で申し上げましたとおり、これまでの観光というものは、文化資源を商品として取引し、消費していく仕組みを作っていました。もっと言ってしまうと——旅行業関係の方がいたら申し訳ないんですけども——例えば、どこかの地域を使った商品を作るといった時に、その観光資源は、はっきり言ってタダで使います。タダでその資源を使って、旅行商品を作って儲けることができます。例えばこれ、石油のような天然資源でしたらどうでしょう？当然お金を支払わなければいけません。でも観光資源の場合、そうではなくて、タダで使って儲けることができる。そういうことをやっています。そしてどんどん儲かるように沢山お客さんを呼ぼう、ということになる。しかしそれでは駄目なんじゃないか、これは先ほど石森が申し上げたとおりです。

一方、鷺宮・幸手の例を見ていますと、文化資源をどう取引するか、とかではなくて、文化資源というものが、媒体（メディア）になって、価値や気持ちを共有したり、交流したりすることができている。これからの観光を考える際、この点が実は非常に重要だと思います。それを我々、「創造型観光」というふうに、「消費型観光」と対比させて名付けてみました。「鷺宮幸手方式」というふうに仮に呼んでいるのですが、ポイントが二つあったのではないかと思います。

一つ目は、資源や顧客を売り物にしないように、商業主義に陥らず、常に資源と顧客に敬意を払っていた点です。資源と堅く書いてありますけど、要は、「らき☆すた」という作品そのもの、世界観、そしてキャラクターに、敬意を払ってファン目線でまちおこしが行われてきました。これが一つ重要なポイントかと思っています。

そして、もう一つは、来訪者の側の皆さん、アニメファンの皆さんを中心とした来訪者の方々、こうした皆さんが地域社会に敬意を持って、非常に立派な振る舞いをされた点です。そして、ボランティアとして様々な面でまちおこしに協力されています。この二点がうまく組み合わさって、非常に幸せな関係がここで育ったのだと思います。

商工会の皆さんやファンの皆さんとお話をしていて、いつも感心する言葉なのですが、地域の側、特に商工会の皆さんにお話を聞きますと、ファンのために、せっかく来てくれた人のために何か出来ないだろうか、楽しんでいってもらうためには何か出来ないだろうか、ということを、常におっしゃっています。ファンの皆さんも、舞台にお邪魔して迷惑をかけてないだろうか、ただロケ地を見て、それで帰ってくるのは失礼なんじゃないかな、ファンを快く受け入れてくれた地元のために何か出来ないだろうか、いつもそういったお話をされています。実は私も、皆さんには及びませんが、一ファンとして研究をさせていただいて、地域の皆さんやファンの皆さんに迷惑をかけていないだろうか、と常々思っています。「☆ちゃんねる」に叩かれるような研究をしていて迷惑をかけていないだろうか（笑）。取材、研究をさせていただいて、それだけで帰ってくるのは失礼なんじゃないだろうか。そして、こんな変な研究を快く受け入れてくれる地元

の皆さんのために何か出来ないだろうか。

こういう話をしていましたら、あるファンの方が、「山村先生、そんな心配しないでください。学会で追放されてもコミケがありますから。」と励まして下さいました(笑)。本当にありがとうございます。この言葉が本当に支えになりまして、叢書を作らせていただきました。もうこれ、コミケの同人誌のノリでやらせていただいております。同人誌的な研究の道を歩みたいなど(笑)。

真面目な話題に戻ります。観光の教科書に書いていない人間的な部分が、実は鷺宮・幸手にあるのではないかと。お互いに気持ちよく過ごせる枠組みをどう作るのか。地域と来訪者双方からの取り組み、配慮があった。それから自治の部分ですね。ボランティアの方々の活躍が非常に素晴らしいと思います。今日の痛車祭りでも、ボランティアの方が理路整然と整理をして下さっていました。訪れる人の側にも非常に高い自律性があるのだと思います。

■ 「まちおこし」が進展した背景

松本さんから教えていただいたのですが、鷺宮町の昼夜間人口比率は62.9%なんです。2005年の国勢調査で、埼玉県の中ではワースト1、2を争う数値です。要は人が昼間いないということなんですね。そんな中で、ファンの皆さんですとか、来訪者の皆さんが訪れていただくということは、非常に大きな意味があると思います。

そして、これも後ほど吉岡局長からお話があるかも知れませんが、商工会さんというお立場が、今回、まちおこしの中で非常に大きな役割を果たしたと思います。それは、商工会さんの存在理念でもあると思うのですが、ある商店さんが一人勝ちするという状況は、やはりよくない。そして、商売は勝ち負けではない。これもよく会長、局長からお話を伺います。会員事業主さんで利益を分け合うような、地域全体が盛り上がるような仕組みが出来ないか、という理念で、商工会はお仕事をされています。まずこの点が、これまでの「らき☆すたタイアップ事業」がまちおこしにつながった、最大の背景なのではないかと思います。

そしてそれ以外にも、こうした事業がきっかけとなってまちおこしにまで発展していった背景として重要な点がいくつかあると思います。私の方から三つ、ポイントを絞って挙げさせていただきました。

まず1点目に、これは本当に基本的なところだと思うのですが、メディアとしてのコンテンツ。そのアニメ作品が非常に高い質と魅力を持っていた。

そして、2番目として、その作品に対して、皆さん、本当に敬意と愛を持って接していたという点です。住民の皆さんも敬意と愛を持っていらっしゃった。

そんな中で3番目。鷺宮・幸手では、その商店街の義理人情が厚いと思うんですが、人間味のある実際の土地での交流が展開したというところが、大きなポイントかと思います。

今、日本全国、様々な地域で、「アニメをきっかけとしたまちおこし」や「漫画でまちおこし」などの動きが見られるようになりましたが、そういった事業を行う際は、まずはその対象である作品が重要です。作品に対する愛から出発しないといけない。この結論を、私は鷺宮で学びました。

こうしたポイントがあってこそ、アニメファンの皆さんが、地域のファンになっていったのだと思います。ひょっとしたらイベントだけ来て、もう来ない。でも、そうではなくて、何回も来るようになる。その幸せな関係性が出来あがって、まちおこしに繋がっていったというのは、すごいことだと思います。

もう一つ面白い点なんですが——実は今日のフォーラムで、情報技術、情報社会というテーマがありますけれども——インターネットですとか、そういった情報コミュニケーション技術が発達して行って、皆さんこうした技術を用いていろいろと情報を共有されています。例えば聖地巡礼の情報等を共有したりしながら旅をしていらっしやる。ところが、実際に鷺宮で展開している交流というのは、非常にアナログな人情味溢れる触れ合いなんですね。このアナログ感は、やはり魅力です。そして、今後の観光のあり方のヒントになるとと思います。

■注目すべき商工会の取り組みについて

さて、これから簡単に、このあと商工会の皆さんから御紹介いただくお話に関連しまして、私なりにポイントをいくつか紹介しておきたいと思います。

1点目、これまでの鷺宮・幸手のまちおこしの中で行われてきたイベントについてです。非常に重要なイベントが三つあったのではないかと考えています。

1つは、飲食店スタンプラリーです。このイベントは、ファンの皆さんの、町の中での行動範囲を一気に広げて、事業主さんと来訪者の皆さんとの間に、顔の見える交流を作り出した、画期的なイベントだったと思います。

そして2つ目は、これは最近オープンしました美水先生の旧御自宅のギャラリーです。幸手市商工会さん、ファン有志の皆さんが非常なご努力をされてオープンに至りました。私も、行った時に、仏壇の前で感動して動けなくなってしまったんですが、驚異のクオリティが実現されています。これは本当に素晴らしいです。

そして、3つ目は——これは後ほど、松本さんの方から嫌というほど（笑）映像をみせられると思います——鷺宮ドラマです。先ほど石森の話にもありましたとおり、中小企業庁の「地域資源∞全国展開プロジェクト」の採択事業になっております。こういう新しい取り組みが行われています。

そして、番外編なのですが、「萌川柳&狂歌コンテスト」。今日も第2回コンテストの応募受付がありました。実は私がこれを番外編として注目していますのは——坂田さんからお伺いして、すごいなと思ったのですが——予算0円なんです。予算0円でもここまで出来るんだという驚異の事例だと思います。第1回目の応募には700通以上集

まったという非常に面白いプロジェクトでした。こういったことを、このあと商工会の皆さんに御紹介いただきたいと思います。

■愛と敬のある、まちおこし。

そして、私の方からは最後になります。一言で言ってしまうと、私たちが鷺宮・幸手から学ぶことは、「愛と敬のある、まちおこし」に尽きるのかなと思います。これからもそうあり続けていただければ一ファンとして本当に嬉しいです。

そして「〇〇は鷺宮・幸手の住民」という考え方。〇〇は、先ほどの「萌フェス」での「愛を叫ぶ」じゃないですけど、皆さん、好きなキャラクター名を入れていただければ良いと思うんですが（笑）…よく行政の方で、アニメを使ったまちおこしイコール、キャラクタービジネスという発想の方がいらっしゃるんですが、そうではなくて、実は、これまでの鷺宮・幸手の経緯を見ていますと、キャラクターというものをコミュニティメンバーとして——本当にここに住んでいる人。本多町長が住民票出しちゃうくらいの、住民という発想で——一緒に何かするという感覚がここにはあると思います。この感覚、私はすごく大切だと感じています。去年の土師祭でも、御神輿の上にキャラクターが乗っていて、それを皆で担いじゃうわけです。あの瞬間が地域住民としての「らき☆すた」のキャラクターが広く一般に受け入れられた瞬間だったように思います。感動的ですね。

そして今回はドラマがあります。ファンの方も多く出演されていると思うんですが、こうしたひとつひとつの取り組みが、結果としてまちづくりへ繋がってきているのかなと思います。

「まちおこし」という言葉は、何だか、倒れかけたものを起こすという感じがしてあまり好きではないのですが、もし「まちおこし」がそういう意味だとしたら、鷺宮・幸手の事例はそんなレベルは超えていると思います。

私自身も、こんな研究をしながらも、皆さんと一緒に一ファンとして、これからも鷺宮・幸手のお手伝いが出来ればと思っております。私の方からは、これで発表を終わりたいと思います。引き続き、鷺宮町商工会事務局長の吉岡さんから、商工会の業務と役割についてご発表をいただきたいと思います。よろしくお願ひします。

御清聴誠にありがとうございました。